2Mp-4

革衣料の型くずれにおよぼす型入れ方法の影響

昭和女大家政 ○角田由美子、都皮技センター 今井哲夫
昭和女大家政　岡村浩

目的　革は部位による性状そして面積が異なるため、型入れは一枚一枚手作業で行なわれている。発表者等の輸入革衣料の調査[1]では、型入れに起因する外観上の欠点が多く認められ、低価格品は歩留りをあげるために様々な方法で型入れしている現状が明らかとなった。本研究では型入れ部位と方向を組み合わせたタイトスカートの着用試験を行い、型くずれにおよぼす型入れ方法の影響についてとりまとめた。

方法　試料は成牛革を用い、試料革の肩部、背中央部、腹部の3部位に型入れし、それぞれの部位より1着のスカートを製作した。型入れ方向はたて方向（背線に平行）とよこ方向（背線に垂直）の2方向とした。縫製は畜種に適した縫製条件[2]により革服製造メーカーが行なった。着用試験は18才から23才までの5人の被験者が行ない、着用期間は1992年10月から1993年3月迄、1着当たり300時間着用した。着用前後およびクリーニング後のスカートについて外観検査、収縮率、シームパッカリング、ＫＥＳの圧縮試験を行なった。

結果　着用後は、肩部と腹部に型入れしたスカートの収縮率が大きく、型入れ方向ではたて方向の変化が著しかった。型くずれは、型入れ部位と方向にかかわらずスカート丈は収縮し幅は伸びる傾向が認められた。特に試料革腹部にたて方向に型入れした場合の裾幅の変化が大きかった。シームパッカリングは、着用後スカートの前中心において低下が認められ、特に試料革の背中央部によこ方向に型入れした場合に著しかった。着用後のスカートをドライクリーニングすることにより、全体的に収縮する傾向が認められた。

1)日本家政学会誌 ,43,63~73(1992)、 2)日本家政学会誌 ,44,1057~1064(1993)